

ちょっぴり息抜き * 得点上乗せの古文基礎知識

〈第六回〉 古典世界の恋愛事情♡

○初冠（ういこうぶり）伊勢物語第一段

昔、男、初冠して平城の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里にいとなめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。おもほえず、古里にいとはしたなくでありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、忍摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の 若紫の すり衣

しのぶの乱れ かぎり知られずとなむ、をひつぎていひやりける。ついで、おもしろきことともや思ひけむ。みちのくの しのぶもじずり 誰ゆゑに乱れそめにし われならなくにといふ歌の心ばへなり。昔人は、かく、いちはやきみやびをなむしける。

○髪上げ（裳着で行う）

伊勢物語第二十三段

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のものといで遊びけるを、おとなになりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は「この女をこそ得め。」と思ふ。女は「この男を。」と思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。さて、この隣の男のもとより、かくなむ、

筒井筒 井筒にかけしまろがたけ
過ぎにけらしな 妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし 振り分け髪も 肩すぎぬ

君ならずして たれかあぐべきなどと言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

昔、一人の男が、成人し、平城京時代の都、春日の里に縁があつて鷹狩り（鷹を使って獲物を捕まえさせる）に出かけました。里には、とても若く美しい女姉妹が住んでいました。この男は、姉妹の姿をのぞき見してしまいました。都だった頃に比べ、すっかりさびれてしまつたこの里には似合わない、美しい人だつたので、そわそわして落ち着きません。男は着ていた服の裾を切り、歌を書いて姉妹に送りました。しのぶずりという模様の服でした。

春日野の里の生えたばかりの草（＝若く美しいあなた）で染めた乱れ模様のように、私の心はこれ以上ないほど乱れてしまっています

と、大人ぶつて（成人したてのくせに）詠み、送りました。しのぶずりの衣をちようど着ていたのがおもしろいと思つたのでしょうか。「陸奥のしのぶずりのように心が乱れ始めたのは、あなた以外の誰のせいだというのでしょうか」という他の人の歌のアイディアです。昔の人は、成人したてでもこんな優雅なことをしていたのです。

昔、田舎で暮らしていた人の子どもたちは、井戸のところで一緒に遊んでいましたが、大人になり、男も女もお互いに恥ずかしがるようになつてしましました。それでも、男は「この女と結婚したい」と思い、女も「この男と結婚したい」と思い続け、親が持つてくるお見合いの話も聞かずにいます。さて、隣に住んでいるこの男からこんな歌が届きました。

一緒に背比べした筒型の井戸の囲いを僕の背丈はもう越してしまいました。あなたと会つていらない間に。（もうあなたと結婚できるくらい立派に成長したよ）女はこう返事しました。

一緒に比べ合つた（こども用の）おかげの髪ももう肩を過ぎてしましました。誰との結婚の為に髪上げしましたか、あなたの為以外にはしません。とお互に言つて、ついに念願通り結婚したのでした。

嘆きつつ　ひとり寝る　夜のあくる間は
　いかに久しき　ものとかは知る
と、例よりはひきつくろひて書きて、移ろ
ひたる菊に挿したり。

「最近残業ばつかりで会社に泊まり込みだ」といつて私の所へ帰つてこなかつたはずが、新しい女の所にいたのだった——
嘆きながら、一人ぼっちで寝る夜は、朝になるのが本当に遅いということを知りました（あなたといふとすぐ明けてしまう夜も、一人寂しいときは長く感じる）と、いつもより眞面目に（怒つてゐるのが伝わるよう）書いて、色あせかけた菊にその紙をさした。

○降嫁　　源氏物語（若菜上）

「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王、一人、分きて育み生ぼして、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを。」（中略）「かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭に変りては思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりすことやはべらむと、疑はしき方のみなむ、心苦しくはべるべき」と、受け引き申したまひつ。

○三日夜の餅　　落窪物語

あこき、この餅を箱の蓋にをかしう取りなして参りて、「これ、いかで」と言へば、君「いとねぶたし」とて起き給はねば、「なほ今宵御覽ぜよ」とて聞こゆれば、「なぞ」とて、頭もたげて見上げ給ふ。餅ををかしうしたれば、少将、誰かくをかしうしたらむ、かくて待ちけると思ふも、されてをかしう「餅にこそあめれ。食ふやうありとか。いかがする」とのたまへば、あこき「まだやは知らせたまはぬ」と申せば、「いかが。ひとりあるには食ふわざかは」とのたまへば、聞きて「三つ」とこそは」と申す。「まさなくぞある。女は幾つ」とのたまへば、「それは御心にこそは」とて笑ふ。「これ参れ」と女君にのたまへば、恥ぢて参らず。いと実法に三つ食ひて、「藏人の少将もかくや食ひし」とのたまへば、「さこそは」と言ひてゐたり。

朱雀院（源氏兄、前の帝）「厄介な頼みだが、この幼い娘（女三宮）一人を、特別に思つて育てて、あなたの認めになつた人と結婚させてほしい、と言いたかつたのだ。（だから今日あなたを呼んだのだ）」

源氏（自分の息子の夕霧はまだ成熟しておらず、婿にふさわしくないと言う）「失礼ですが、私自身が夫となつて大事にお世話をいたしましたら、宮様も、あなたが世話をしているのと変わりなく生活できるでしようが、ただ、私もいつまで生きられるか分からないので、宮様を一人にしてしまうことが氣の毒です。（源氏・四〇歳、女三宮・一五歳）」と、源氏は自分との結婚を引き受けた。

阿漕（姫の女房）が三日夜の餅を箱の蓋に綺麗に盛つて来て「これをどうぞ」と申すと男君は「すごく眠い」と言つてお起きにならないので「でも、今夜ご覧にならないと」と申し上げると、「なに？」と頭をあげてご覧になる。餅が綺麗に盛つてあるので、誰がこんな用意を？こうまでして自分が来るのを待つていたのかと思つて、「三日夜の餅じやないか。食べ方があるとか。どうするのか」とおつしやると、阿漕は「まだご存じないのですか（まだ結婚していないの？他の人とは遊んでいただけなのね）」と申すと「どうして独身の私が食べるものか」とおつしやるつて尋ねると「三つ噛み切らずにお召し上がりください」と阿漕が申し上げる。「食べにくいな。女はいくつ食べるの？」と男君がおつしやると「好きなだけです」と笑う。「これを食べなさい」と男君が女君に言つても、恥ずかしがつて食べない。男君はまじめに三つ食べて、「藏人の少将（男君の友人で、姫の異母姫の夫）もこんな風に食べたのか」とおたずねになると、阿漕が「そうでしようね」と言ふ。